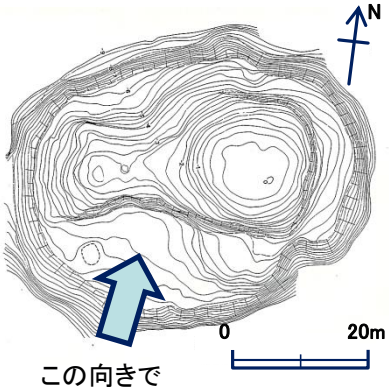
A SPECIAL EDITION
by Teamぶらひがし

小羽町のおもしろい
ネタをご紹介します。

今回は小羽町！

※1 古墳がたくさん！ 小羽町

※1 一般的に使われる「古墳」と表記しました。
古代のお墓は、「墳丘墓」と「古墳」に分類されます。
「墳丘墓」とは、弥生時代までのお墓の呼び名です。
「古墳」とは、古墳時代に造られたお墓の呼び名です。

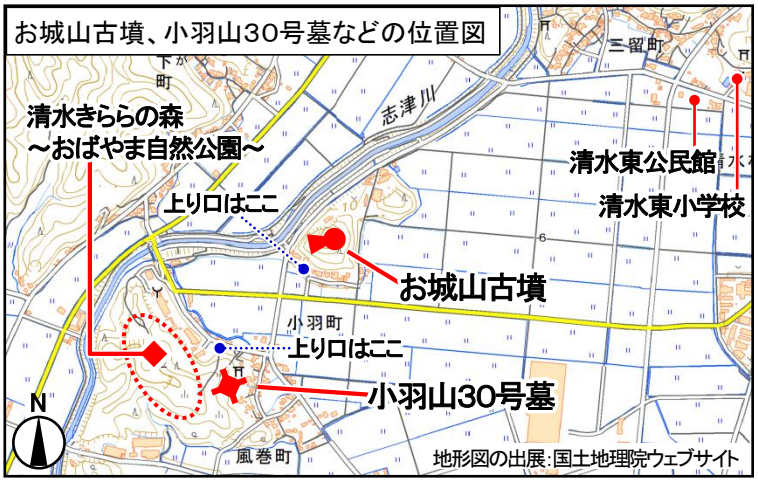


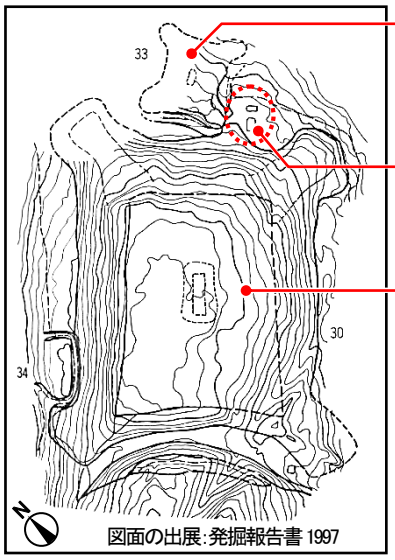
この向きで撮影しています。右側の小高い所が「前方後円墳」の後円墳部分です。

お城山古墳は、向山と呼ばれる丘陵の頂きに造られた前方後円墳で、全長44mあります。発掘されていないので造られた年代ははっきりしませんが、4世紀の末頃に造られたと考えられ、清水地域では一番大きいものです。

※参考の記事引用：旧清水町広報 1988.9号

お城山古墳、小羽山30号墓などの位置図





②33号墓
幼児埋葬の墳丘墓で、極めて良質なヒスイ製の勾玉1点が副葬されていました。

①幼児埋葬の土壙墓
70cmを測る組合せの箱型木棺が安置されていました。

小羽山30号墓
埋葬は墳丘の完成前に行われ、長さ5．3mの墓壙（ぼこう）に長側板の長さ3．7mの組合せの箱型木棺が安置され、副葬品は碧玉（へきぎょく）製管玉103点・ガラス管玉10点・ガラス勾玉（まがたま）1点・鉄製短剣（たんけん）1点が出土しました。

※参考の記事引用：
発掘報告書1997 現地説明板

「小羽山30号墓」は、小羽山で30番目に発見されたという意味です。お墓の形は、出っ張りのある長方形で四隅突出型墳丘墓（よすみとしゅつがたふんきゅうぼ）と呼ばれています。

この特殊なタイプの墳墓は、山陰地方の出雲の王の墓の形であって、その影響を受けています。

「小羽山30号墓」は規模が大きく副葬品が豊富なので弥生時代の「王墓」であると考えられています。

なお、30号墓のテラス上には幼児埋葬の土壙墓（どこうぼ：地面に穴を掘って埋葬する墓。※①右上の図面参照）が2基営まれおり、また、すぐ近くに幼児埋葬の33号墓（※②）が発見されています。

※参考の記事引用：旧清水町広報 1997.10号
発掘報告書1997

お城山古墳はここ

東に向って小型無人機で撮影しています。

小羽町のおいたち

清水総合支所前から、弥生時代の土器が出土している点、また通称「後山（うしろやま）又はお城山」に前方後円墳が造られていることなど、これらのことを合わせ考えると、かなり権威をもった首長一族が住んでいたと考えられ、小羽町には早くから人が住みついていた事がわかります。

・ Teamぶらひがしとは、清水東公民館の広報部を中心とした有志の集まりです。 日々、地区内のおもしろいネタを探しつつぶらついています。

お城山と今井兼平（いまいかねひら）

むかし、小羽山の上に今井兼平という武士が城をつくったんじゃって。それで今でも「お城山」というんじゃが、この今井兼平という武士について、こんな話が伝わっているそうじゃ。

今から八百年も昔の話じゃが、源氏（げんじ）と平氏（へいじ）とが天下をとろうと戦をしていた頃、源氏方の大将に木曽義仲（きそよしなか）という偉い侍がいて、その家来に四天王という四人の強い武士がいたと言う話じゃ。

その四人の中に今井兼平という一番強い武士がいた。義仲がまだ小さい赤んぼうの時、兼平の母が、義仲といっしょに乳を飲ませて育てたので「乳兄弟（ちきょうだい）」ちゅうことじゃ。

その頃天下をとっていた平家を滅ぼそうとして、木曽義仲が京都へ攻めのぼる時の話じゃ。

今井兼平は小羽山に城をつくって、山の下に館をたてて住んでいたんじゃが、平家方の平維盛（これもり）という大将が十万人というぎょうさんな兵隊で、加賀・越前で木曽義仲と戦うたんじゃって。兼平もこの戦に出て手柄をたて、平家方は負けてみんな散り散りになってしもうて、あっちゃこっちゃの山の奥へ逃げこんだんじゃって。

近くの本折の城山にいた斎藤三郎実員（さねかず）という平家方の武士も、追っかけられて清水畑町の山奥へ逃げこんだそうじゃ。

木曽義仲は、平家の軍を追っぱらって、とうとう京都へ入って将軍様になったんじゃ。ほやけど、しばらくで源義経（みなもとのよしつね）という強い大将に攻めたてられて、とうとう粟津（あわず：滋賀県）ちゅう所で戦死してもたんやって。この時、いっしょに戦っていた兼平は、もうこれまでと覚悟をきめ、「日本一の武士の死に方を見せてやるぞ」というて、刀の先を口にくわえて、逆さまになって馬からとび落って死んだっちゅう話じゃ。

話がもとへもどるが、今井兼平は今井兼平は小羽に三年ほといたらしい。その時福井の大町（おおまち）という所の助五郎の娘をもらうて、小羽に住まわせていたそうで、男の子が生まれたんで、大町へ帰って大事に育てたんじゃって。

その子が大きくなって助四郎という名をつけ、その助四郎の子が如道上人（にょどうしょうにん）という偉いお坊さんの弟子になって、恵門坊覚竜（けいもんぼうかくりゅう）という名前をいただいてお坊さんになったそうじゃ。

また、その子も大変偉くなって、今井覚右エ門尉金真（いまいかくうえもんのじょうかねまさ）と名を改め、お寺を建てたのが、福井のみのり町にある教覚寺（きょうがくじ：現福井市みのり２丁目）のはじまりじゃって。

今井兼平は小羽へ、木曽義仲の守本尊（まもりほんぞん）八幡様のお木像（もくぞう）をお祭りして、義仲のご無事を祈ったとのことで、そのお木像の裏に「朝日将軍義仲守本尊」と書いてあるっちゅう話じゃ。

それから大分あとになってから、小羽のもんが小羽山へお宮さんを建て、今井兼平を神様に祭ったのが、今井神社のはじまりじゃって。ほれから明治時代のおわり頃、山の上は参るのにあんまり便利が患いんで、下の八幡様と一緒にお祭りしたのが、今の今井神社のいわれじゃそうじゃ。

記事の引用：清水町のむかしばなし

※ 昭和 61 年 8 月、旧清水町が発行した「清水町のむかしばなし」の中に収録されている、「民話」をとりまとめました。
※ 概ね原本のとおりのため、難解な方言もあるかもしれません。

茶臼山権現（ちゃうすやまごんげん）

小羽町のがらがら山（旧清水町役場西側の山）の山頂にある円墳上に、薬師如来（やくしにょらい）がまつられてました。この山頂は、茶をひいて抹茶をつくる石臼の形をしていたので「茶臼山」と名付けられました。 後世の土地開発により山頂は削られ薬師如来を祀るお堂は現在の地に移設されています。 地元では、「高堂様」として親しまれています。

主な記事の引用：清水町のむかしばなし